

### 第3節 指定に至る調査成果

#### 第1項 自然的環境

##### 1 植生

山一帯は大部分が山林で、七尾城跡中心部の平地やゆるい斜面にはスギ林があり、細い尾根や急傾斜地にはヤブツバキ林や落葉樹を中心としたコナラ林が多くみられる。

城山周辺はもともと暖地性のヤブツバキ林であったが、長年にわたる植林などによりアカマツやコナラを中心とした二次林となった。かつて、これらの木々は薪や木炭などとして活用されており、山中には炭焼き窯跡も確認できる。

こうしたアカマツやコナラの二次林は、炭焼きの衰退とともに建築材となるスギやアテ（アスナロ）林に代わっていった。しかし、建築材として利用出来るまでに成長した頃には、安価な外国産材の大量輸入により需要が減少し、山林の手入れが行われなくなった。最近では、一部で強制伐採が行われているものの荒廃は甚だしく、モウソウチクが低地からスギ林に入り込んでいる状況も多く見られる。長屋敷跡や善谷郭群の一部には、マダケも繁茂してきている。

さらに、スギなどの植林されていない雑木林においても、ササ類が覆い尽くしてきている。2010年頃には、カシノナガキクイムシが大発生し、ミズナラやコナラの大木が枯死した。



コナラ林（小松原道（隠し道））



スギ林（山道（善谷支群））



モウソウチクが侵入した杉林（城平支群）



土砂崩れで竹林が山道を塞ぐ（落ヶ谷）

安寧寺から北東に延びる尾根筋には、戦時中コルクの代用として植林されたアベマキの巨木が見られ、安寧寺、二の丸や本丸駐車場周辺などには、モミジ類やサクラ類が植樹されている。

なお、山林の荒廃や休耕田の増加により山道がどんどん失われつつあることに加え、昨今のイノシシ被害の増加によって山林の荒廃が進行し、植生も大きく変わりつつある。



ミズナラの枯死 1



ミズナラの枯死 2 (県道城山線から鍛冶屋川の対岸)



ミズナラの枯死 3  
(南大香 1 号線)



モミジ (二の丸跡)



イチリンソウ (二の丸跡)



炭窯跡 (烏帽子尾根)



炭窯跡 (善谷群)

以下に、城山周辺の希少植物を紹介する。

絶滅危惧種としては、ヤマシャクヤク（県Ⅰ類）、エンゴサク（県準）、サイカチ（県Ⅱ類）、ササユリ（県準）、キンセイラン（県Ⅰ類）、ギンラン（県Ⅱ類）、ツチアケビ（県準）、ヤブミョウガ（県Ⅱ類）、カラハナソウ（県準）、カラタチバナ（県準）、今回確認はできなかったがコオニユリ（県準）がある。



エンゴサク



ササユリ



ツチアケビ



ヤマシャクヤク



ヤブミョウガ



キンセイラン



ギンラン



カラタチバナ



ウラジロ



オウレン



イワウチワ



イワカガミ



ヒトリシズカ



イチヤクソウ



オカトラノオ



ツルニンジン



オオカニコウモリ



ソクズ



トンボソウ



ツルボ



キツネノカミソリ

なお、七尾城域となる城山周辺の植生については、竹林や休耕田の拡大を反映した『植物』及び『植物群落と樹木』の調査を行い、植生分布図（図 23）を作製した。

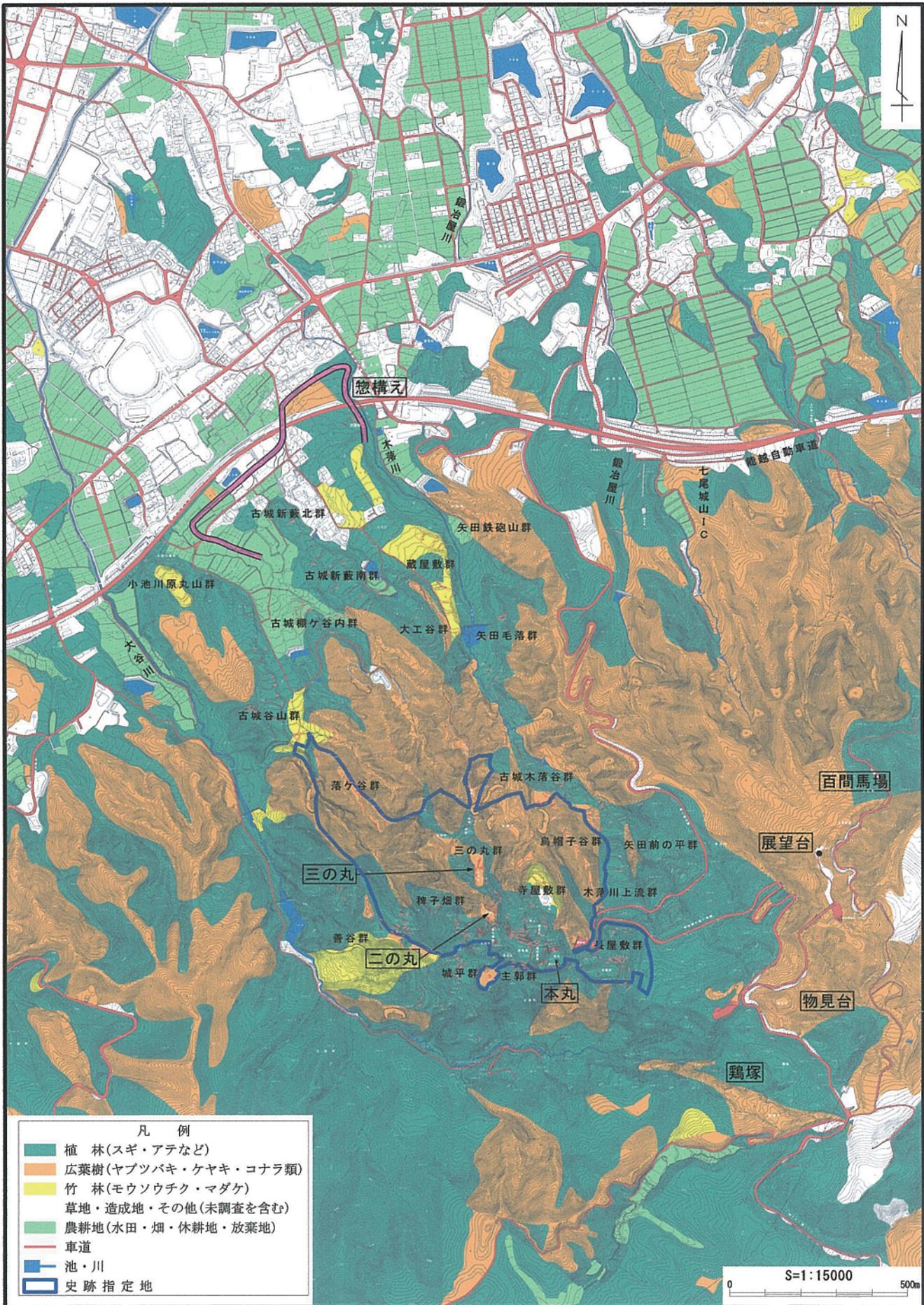


図 23 七尾城跡周辺の植生分布図（一部未調査）

## 2 動物

### 哺乳類

哺乳動物の多くは、植物種子などや根、あるいは昆虫やミミズなどを給餌する。その行動は、夜行性のため目撃することはあまりないが、稀に夕暮れ時などに出会うことがある。2007年頃には、展望台遊歩道で側溝を住家とするキツネ（ホンドキツネか）をよく目撃したが、来訪者の増加に伴いその姿を見るのが無くなった。

ニホンカモシカは、桜の馬場から西の丸、旧道の時鐘跡下の崖、県道城山線沿いのスギ林で目撃したが、最近では目撃していない。

テンは、二の丸で目撃し、ホンドリスは、旧道や本丸駐車場、遊歩道、小松原道などでもよく目撃している。

イノシシは、2009年秋に城山と石動山を結ぶ「林道城石線」を歩く5頭を目撃して以来、県道城山線でドングリを食べている姿や、沢の崖面などで度々目撃していることから、多数生息しているとみられる。また、イノシシによる土耕の痕跡も各所に多くみられ、七尾城跡の遺構にも被害を及ぼしている。

ツキノワグマは、七尾城跡周辺部での目撃情報があるが、七尾城跡では今のところ目撃していない。

### [イノシシ]



群れ（県道城山線：2012年10月14日）



糞（城平群：2013年4月20日）



足跡  
（赤坂道：2014年12月10日）



子  
（展望台：2016年7月29日）



巣  
（木落谷群：2017年4月21日）



ノウサギ  
(長屋敷北側:2013年4月23日)



ホンドリリス  
(時鐘跡:2016年7月31日)



ニホンカモシカ  
(県道城山線:2010年8月23日)

### [鳥類]

30年前までは城山は渡り鳥の中継地になっているという話があった。確かに以前と比べれば小鳥も少なくなっているようで、春にはウグイスが早々と鳴き始め、メジロやヒヨドリがサクラの蜜や実を食し飛び交っている。初夏にはホトトギスやキジバトの声が聞かれ、枯れた樹を穿つキツツキの音あちこちから聞かれる。秋にはイカルやジョウビタキなどの多くの渡り鳥が来ていると見られるが、シジュウカラやホオジロが年間を通じて確認できる。

たくさんあった大きなアカマツも枯れてしまい、所々に直径1メートル程の古株が残っている。こうしたアカマツの枯渇も一因なのか、ときどき見かけられたオオタカもほとんど見かけなくなった。2012年には、『能登のオオタカ絶滅か』と大きく報道されたが、2017年8月25日の城山の観察会では、小高いスギの木でその姿を確認している。



ホオジロ



モズ



ヒヨドリ



シジュウカラ



マヒワ



イカル



ジョウビタキ



トビ



ウソ

### [そのほかの動物]

小動物は、日本本土に生息する多くが生息していると思われる。

以下に、確認している主な小動物の写真を掲載・紹介する。

昆虫は、温暖化にともないアオマツムシが5年ほど前から徐々に本丸周辺まで生息範囲を広げてきている。

### [爬虫類]



マムシ



アオダイショウ



シマヘビ



ニホントカゲ

### [両生類]



クロサンショウウオ



ヒダサンショウウオ



アマガエル



モリアオガエル



アズマヒキガエル



アカガエル



サワガニ



カタツムリ

[昆虫]



オオイトトンボ



カワトンボ



イトトンボ



シオカラトンボ



ハラビロトンボ



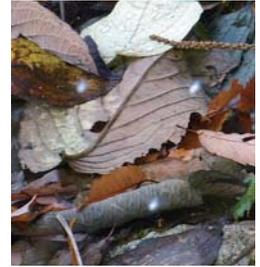
アキアカネ



キイロイトトンボ



クロスジキンヤンマ



ユクムシ



キアゲハ



モンキアゲハ



カラスアゲハ



トビナナフシ



タマムシ



ニホンミツバチ



ヒメコブオトシブミ



キマワリ



カナブン



ヒメクワガタ



ゴマガラカミキリ



ヒグラシ



ツクツクボウシ



コガネムシ

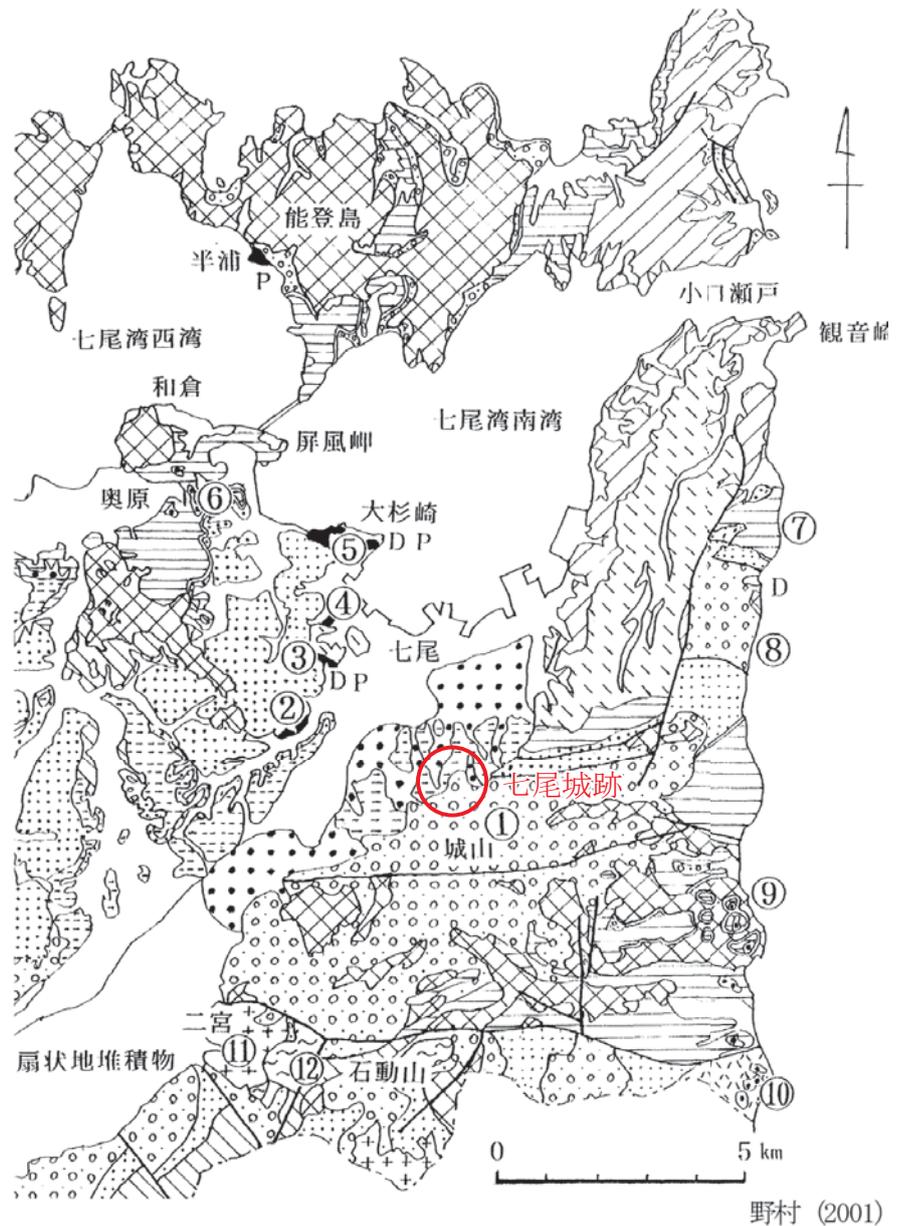
### 3 地質

七尾城跡が位置する城山一帯の地層は、下部中新統の城山礫岩層と称されている(糸野編1965)。

#### a. 七尾城跡周辺の地質と城山礫岩層

新版・石川県地質図(糸野編1993)の七尾市地域の一部を修正し模写した七尾周辺の地質図を第24図(野村2001)に示し、その地質図の凡例と地層名・時代を第25図(野村2001)に示す。この地質図から、七尾城跡のある城山礫岩層の南部には、城山より高海拔の石動山系に至る範囲に、通称熊渕安山岩類・船津花崗岩類、そして飛驒変成岩類が分布していることが分かる。

前期中新世(1700万年～1500万年前)、これらの風化した岩体が風雨によってけずられ、大雨の流れで運搬され堆積して出来たのが、城山礫岩層である。そこで、これらの岩体類と城山礫岩層について、野村(1996)の報告を基に簡単に解説する。



第24図 七尾城跡周辺の地質図

#### 飛驒変成岩類

地球誕生後の原始大陸が風雨にけずられ、砂や泥となって約15億年前までの原始の海に堆積して地層となる。その後、約6億年前までに地熱や地圧の作用で変成岩に変わった一つ

が、この飛騨変成岩類で、やがて隆起して現在の日本列島の土台石となっている。七尾市水上町墓谷（がばだん）や石動山で見られる飛騨変成岩類は、片麻岩と石灰岩である。

片麻岩：一見かすり模様の御影石といった顔つき。正式には「黒雲母片麻岩」と称され、黒雲母の黒い部分と長石と石英の白い部分が、すじのように薄い層の互層をなしている岩石である。

石灰岩：「晶質石灰岩」と称され、全体が乳白色の岩石で、新鮮な凹凸の割れ面がチラリと光を反射する。昭和40年(1965)頃までセメントの原料として利用されていた。

七尾城跡で用いられている石垣の石材は、城山礫岩層に含まれる岩石で、それらは、花崗岩・安山岩・流紋岩などであるが、ごくわずかにこの飛騨変成岩類の片麻岩と石灰岩がみられる。

### 船津花崗岩類

1.9億年前(ジュラ紀初期)、飛騨変成岩の隙間や割れ目に侵入したり、押しのけたりして入ってきたマグマが地下深くに冷えて固まるとされている(深成火成岩)。花崗岩の岩体や露頭は、七尾で見えることは出来ないが、中能登町二宮から石動山への道路横の崖や採石場で見られる。少し離れた能登一の高い山・宝達山は、この花崗岩から出来ていて、これらの花崗岩を一括して「船津花崗岩類」と呼んでいる。

### 熊淵安山岩類

約2500万年前から、北海道から山陰にかけ日本海側沿いの大地に大変大きな割れ目ができて、沢山の火山が大爆発を続け、日本海の基ができたとされている。そして、約2000万年前後の激しい火山活動が、それま

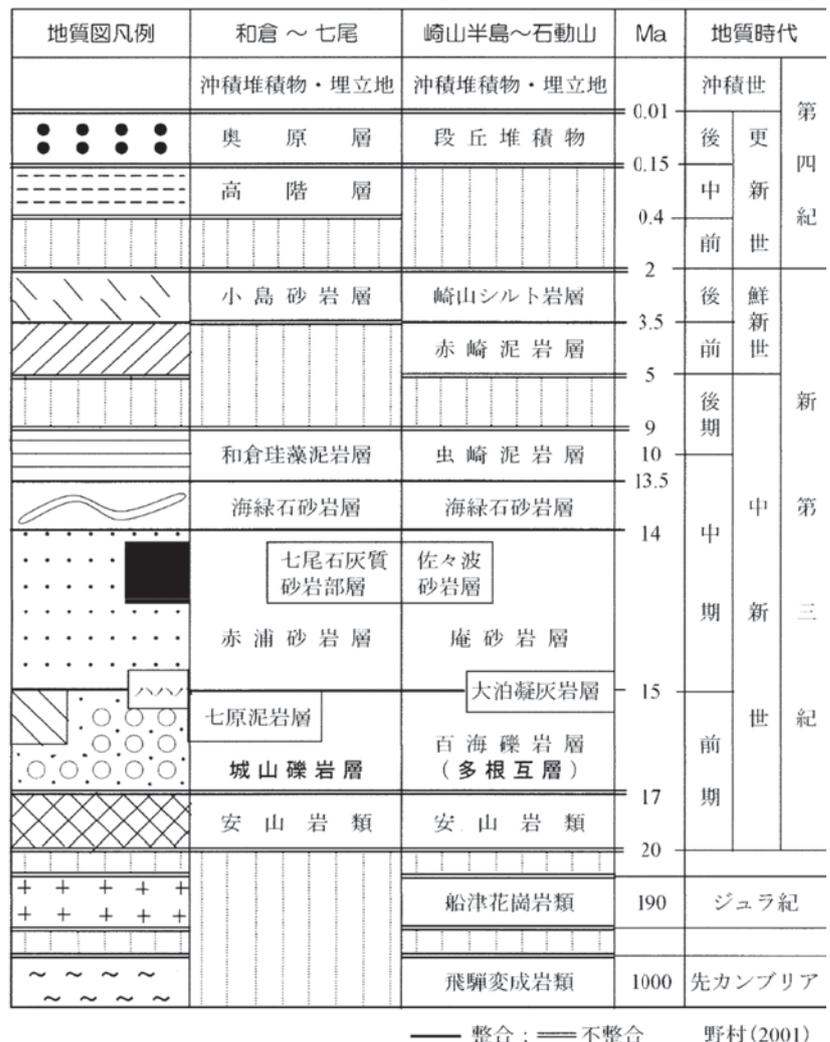


図 25 七尾城跡周辺の地層名と時代

での大地(飛騨変成岩類)を吹き飛ばし、能登一帯を安山岩類の陸地(基盤)につくり変えた。このとき能登半島にできた安山岩類を一括して「穴水累層」と呼び、その一部である七尾市の佐々波の山・黒崎海岸・熊渕川両岸に見られる安山岩類を「熊渕安山岩類」と呼んでいる。流紋岩の明確な露頭は見られないが、流紋岩は安山岩類周辺の一部に形成されていると考えられる。

### 城山礫岩層

先の火山活動によってつくりだされた石動山北側から能登島に至る大きな安山岩の凹地(湖)に、約1700万年以降、片麻岩や花崗岩の風化し削り取られた礫や土砂が石動山山系から、近くの安山岩や流紋岩の礫が大量に運び込まれ堆積し、礫岩層が形成されていった。礫岩層中の片麻岩や花崗岩には、風化して脆くなり手で砕けるような状態の「腐り礫」も多く含まれている。また、絶滅植物ヌマスギ類の化石(珪化木)が見つかるが、貝類などの海生生物化石が全く含まれていないことから、本層は淡水域での堆積し形成されたものと考えられる。

城山礫岩層は、地域によって百海礫岩層あるいは多根互層と呼ばれている。

#### b. 七尾城跡の石垣石材

野村(1996)の報告をもとに、七尾城跡の石垣の石材として主に用いられている花崗岩・安山岩・流紋岩の岩質について以下に簡単に解説する。

花崗岩：花崗岩を造る鉱物は一般に石英・長石・角閃石の4種類で、それらの鉱物を含む割合や結晶の大きさによって、花崗岩の名称が異なる。石動山のふもと二宮に見られる花崗岩は、鉱物結晶が比較的大きいことから「斑状」、角閃石を含む割合が多いことから「閃緑岩」が加えられた『斑状花崗閃緑岩』とされ、大きい結晶の長石は肉紅色を示し、黒っぽい黒雲母や角閃石の量も多く、石英が半透明で灰色に近いこと等から、全体として暗い肉紅色となっている。石垣に利用されている花崗岩は、この肉紅色の花崗岩の他に、一般に墓石として利用されている岩石に近い灰白色の花崗岩もある。また、温井屋敷にある「九尺石」と呼ばれる岩石も花崗岩である。

安山岩：安山岩は、マグマが地表近くや地表で冷えて固まった火成岩である。岩石の色は、一般に黒っぽいのが、場所によって異なり暗灰色、暗褐色を示す。岩石中にキラリと光る輝石が含まれることから、「輝石安山岩」とされている。

流紋岩：流紋岩は、黄白色の長石と灰色がかった石英の2つの鉱物が交互に重なって流状を示し、全体に明るい黄白色の火成岩である。石垣に利用されている流紋岩は、風化が進み流状(縞模様)が不明瞭で、斑状結晶を含んでいて、典型的な流紋岩の特徴と異なる。

石垣の石材についてまとめると、石材は城山をつくる城山礫岩層に含まれる岩石で、城跡周辺の崖や尾根・谷に露出したり、含まれていた岩石を掘りだして利用したと考えられる。また、崖から谷川に落下した岩石を運び上げて利用したとも考えられる。

つまり、極めて容易に入手出来る地の利を活かした石垣であることを示している。